

湘南藤沢学会 「研究助成基金」 成果報告書

国際学会 21st European Conference on Pattern Languages of Programs(Euro PLoP 2016)における
「Generator Patterns: A Pattern Language for Collaborative Inquiry」の向上に向けた研究発表

政策・メディア研究科一年 長井雅史

1. 活動日程・場所

2016年7月6日～7月10日 ドイツ・バイエルン州イルゼー

2. 活動の目的

本研究では、新たな発見を生み出すために複数人で行う探究を導く役割として「ジェネレーター」という概念を定義付け、かつその実践方法を「ジェネレーター・パターン」として40個の秘訣にまとめあげた。今回の活動では、ドイツで開催される国際学会「21st European Conference on Pattern Languages of Programs(EuroPLoP 2016)」にて、これまでの研究成果をまとめた論文「Generator Patterns: A Pattern Language for Collaborative Inquiry」(Masafumi Nagai, Taishi Isaku, Yuma Akado, Takashi Iba)を発表した。そして、パターン・ランゲージの専門家たちとのディスカッションやフィードバックを受けることで、研究の内容をより洗練させることを目的とした。

3. 研究の成果

新しく提唱するジェネレーターという概念、及びにその実践方法が今の成果物から伝わるかどうか、そしてそうでないのならば何が改善点なのかを明確にするために学会参加した。そういった目的意識の下、今回の学会で得られた成果は主に以下の三点である。

一つ目は、「ジェネレーター」という概念の特異性が伝わり、かつ「自分にもできそう」と思っただけだったことだ。論文を読むことで、「いつも自分たちが行っているモデレーターやファシリテーターの役割とは違う」ということを理解していただけた。さらには、そういった新しい概念だからと言って一部の特殊な人しかできない役割ではなく、「意思と願望があればでき、かつ自分らしいスタイルを持つこともできる」というコメントをいただけたことは、ジェネレーターの実践方法をパターン・ランゲージという形で記述した意義であった。

二点目は、その一方で既存の役割との差異が明確化されておらずわかりにくいという意見があった。コンセプトとして違うのはわかるがもっと具体的に見たときに、振る舞いとしてはどういう違いがあるのか、場への効果としてはどういう違いがあるのか、どういう状況の違いに応じてファシリテーターやジェネレーターを役割を使い分ければいいのかなど、明記できていない部分が明らかになった。

三点目は、既存の理論とジェネレーター概念の繋がり不明瞭さである。複数人による探究のプロセスとして **Collaborative Inquiry** という理論を引用し、ジェネレーター概念の前提としているものの、理論と役割がどう関連しているのかが伝わらないというフィードバックをいただいた。それが故に論文で示しているジェネレーター・パターンが、結局はジェネレーターの振る舞いのことを言及しているのか、**Collaborative Inquiry** の秘訣について言及しているのかわからず、概念の定義に曖昧さが出てしまっているという意見であった。

このように、今後さらに深めていくにあたって、非常に有益な意見をいただくことができた。また、「自分たちのプロジェクトにおいてジェネレーター・パターンを用いたい」という声もいただくことができ、研究の必要性を感じることもできたのも今回の成果であった。



図 1 ライターズワークショップの様子

4. 今後の発展

今回の学会で発表された論文のまとめが“EuroPLoP 2016: Proceedings of the 21th European Conference on Pattern Languages of Programs”として、ACM Digital Libraryにて公開されるため、2016年11月28日を期限に論文の最終修正を行う。修正するにあたって重要な論点は主に二つある。一つ目は、ファシリテーターやモデレーターといったコラボレーションを支えることを目的とした既存の役割を調べ、役割の機能と必要な状況の観点からそれらとの差違を明確にしていくことである。二つ目は、**Collaborative Inquiry** に関する理論とジェネレーターという役割と結びつきを強めることだ。このような修正を経て、最終的には探究型教育やプロジェクトを行う現場に届け、活用していただくことを試みる。

5. 謝辞

研究の発展に繋がる議論の機会をつくってくださった EuroPLoP2016 関係者の皆様、そして研究発表を行うにあたり助成金をくださった湘南藤沢学会様に心より御礼を申し上げます。